



近藤克則(著)

「健康格差社会」を生き抜く

松村医院

松村 真司

1963年公開、黒澤明監督、「天国と地獄」。黒澤の数多い傑作作品のなかの一つである。本書を一読した後、この映画のラスト・シーンを思い出した。貧しい家庭に生まれ、医師の道を歩むも誘拐および殺人の罪で拘留中の加害者竹内と、同じく貧困家庭出身ながら一代で身を興し、竹内に身代金を渡したために失脚した被害者権藤とが、拘置所の金網越しに対峙する。山崎努演じる竹内は、貧しい自宅から、山の上に屹立している権藤の豪邸を見上げる日々のなか、いかに憎しみを募らせたかを語る。当時新人俳優だった山崎の鬼気迫る演技は、善悪とは何か、人間の尊厳とは何か、という根源的な問いを今なお私たちに投げかけている。

本書は著者らが行った愛知老年学的評価研究(AGES: Aichi Gerontological Evaluation Study)から得られた膨大な実証データの知見を中心に、「健康における不平等」「健康格差」の問題に関する国内外の研究結果を一般向けにまとめ、「生存」「健康」という、等しく守られるべきものを巡って現在社会に生じている問題を提示するとともに、それらに今後どのように対応すべきかを解説している啓蒙書である。

とくに、本書の第三部「『健康格差社会』を生き抜くために」では、これらの格差への個人レベルでの対応法から、政策面における提言に至るまで、内外の取り組みを踏まえて示されている。特筆すべきなのは、それらのすべてについて、私たちのこれからの社会は「経済発展とともに Well-being(幸福・健康)を重視する社会を目指す」べきである、とい

う著者のメッセージが、一貫して提示されている点である。もちろん著者が本書のなかで提案する「第三の道」については、よって立つスタンスに応じて賛否があるだろう。しかし、わが国の医療保健政策のみならず、私たちがどのような社会を目指すべきか、その道筋を考えるうえで、本書はきわめて重要な視点をエビデンスとともに提示している。一般向けの書ではあるが、すべての医療者にとって必読の書である。

「経済的繁栄」が「幸せ」あるいは「正しい人間のありかた」とは直結していないのは自明のようにも思えるだろう。しかしだからといって皆が貧しいままでよい、ということでもない。高度経済成長によってわが国が到達したアウトカムの一つが、世界に冠たる健康指標を達成したことであった。しかし、その勝利の結果得られた高齢社会は今、経済成長の重たい足かせとなっている。私たちが「どのような社会を実現すべき」なのか、それは黒澤が高度経済成長の始まる直前の1963年に、竹内と権藤という二人の人物の会話に乗せて私たちに提示したシーンから透けて見えている。2009年に起きた政権交代とは、単なる政党や政治家の好き嫌いや、政治システムの転換にはとどまらない、根本的な価値判断の変化の前触れである。「天国と地獄」が公開されてまもなく50年。今私たちは深い考察と選択とが必要な時代にいるのだ、とあらためて感じるのである。

●新書判/256頁/定価819円(本体780円+税5%)
2010年/朝日新聞出版刊